

アウトドア・ライフ

～未知なる世界をタフに渡り歩く醍醐味～

岡部 徹 教授(生産技術研究所)

私はアウトドア・ライフが好きだ。だが、東大で研究室を構えてからは、なかなかアウトドア時間がつくれなくなったのが残念である。そこで、レアメタルの仕事にかこつけてアウトドアを楽しむ努力をしている。

今年の9月には、北緯70度、北極圏に入って350^キメートルほど北に位置するノルウェーのトロムソという町に出向き、オーロラを観る機会に恵まれた。トロムソからは、洋上に出て、フィヨルド伝いに船で3日間かけてノルウェー海を南下し、トロンハイムの大学に出向いた。もちろん遊びに行ったわけではない。“最先端?”の研究者として、世界“最北端”の大学を視察し、バイキングの末裔を相手に洋上でのチタンの国際会議に出席して座長などを務めてきた。陸に上がってからはノルウェーの大学の博士の学位審査も行なった。人の3倍は仕事をしているつもりである。

思い起こせば、高校1年のときに、2週間、放浪の一人旅に出て、北海道の名物ユースホステルを渡り歩いてからアウトドアが好きになった。礼文島の「愛とロマンの12時間ハイキングコース」、利尻島や大雪山などの登山は、辛い経験でもあったが、今となっては心の玉手箱となっている。函館山からの夜景を見るときは、ヒッチハイクを利用して、お金を節約した。帰路、ついには手持ちのお金がなくなり、青函連絡船や鉄道の車内でヒモジイ思いをしたのも、今となっては懐かしい。

どういった経緯か覚えていないが、中学時代の友人と2人で、伊豆の大島に渡って自転車で島を一周したこともある。不思議な体験を共にした友とは、30年経っても親しく過ごせるので良いものである。

大学生のときは、授業に出ずにアルバイトと旅行ばかりしていた。ゴザと寝袋を

抱えて、国内外を幾度も旅行した。ヒッチハイクも得意になり、北海道やイタリアなどのハイカーに適した場所だけでなく、京都→東京間をヒッチハイクで何度か移動したこともある。苦労も多かったが、今となっては、良い経験となった。

大学の寮生だったころは、野営のスペシャリストとして、お金のかからない宿泊が必要な旅行にはしばしば駆り出された。海外での貧乏旅行の武勇伝や蛮行?は、今でも大学の同級生との飲み会の酒の肴となっている。

東大に移ってからは、タスマニア島のクレイドルマウンテンというトレッカー垂涎の的の原生林の近くにレアメタルの鉱山があるということを知りつけ、わざわざ訪れたこともある。

南アのプラチナの鉱山に出向き、地下800^{メートル}の採掘現場に行く機会にも恵まれた。アフリカの楽しさを知ったので、マダガスカル島の

鉾山に出向こうと目論んでいたが、クーデターで計画が没になった。気持ちを立て直し、来春は、南米のボリビアの山奥に出向こうと思っている。

私は、大学4年生のときから、20年以上、一貫してレアメタル研究に携わっている。この研究分野の重要性は、今日のように認知されておらず、研究活動の継続は苦勞と困難の連続であった。しかし、思い起こせば、アウトドア・ライフを通じて培った経験が、研究の遂行に役立っている。

未知なる世界の探求。困難や障害に遭遇しても、努

力や工夫で立ち向かう不屈不撓の精神。また、人の厚意や助けに、ありがたく感謝する気持ちを持つこと。これらは、研究だけでなく、すべての仕事に当てはまるが、私はアウトドア・ライフを通じて多くのことを学んだように実感している。

学外でも、アウトドア活動を通じて地域貢献をしている。武蔵野ジャンボリーという地域プログラムに、地元の小学生4、5、6年を引率して、ほぼ毎夏、2泊3日で長野県の山奥(川上村)に連れ出すイベントに野外活動の指導員として参加している。地元では、“暇なキャ

ンプのリーダー”あるいは“役に立たない「ダメ」リーダー”と思われているようだが、子供達が、アウトドア・ライフの醍醐味を楽しんでいる様を観ると、なんだか私も幸せになった気になる。

(寄稿)

★★★

93年京都大大学院博士課程修了。工学博士。米MIT、東北大などを経て、09年より現職。専門は、レアメタルの製錬・リサイクル技術の開発。

出典:

'アウトドア・ライフ～未知なる世界をタフに渡り歩く醍醐味～'

岡部 徹:

東京大学新聞, 財団法人 東京大学新聞社, 「大学の窓」のコラム

2010年11月23日 火曜日 第2531号(通算第3631号)(2010), 第3面.